当選者と落選者の関係

毎週日曜日午後五時半から、日テレで放映している「笑点」という番組を知っていますか。その番組の後半に「大喜利」というコーナーがあります。七名のベテラン落語家のやり取りが茶の間の笑いを誘う楽しい十五分間です。

前司会者の故桂歌丸さんが、生前に次期司会者として選んだのは春風亭昇太さんでした。ひそかに司会の座を狙っていた三遊亭円楽さんはそれがどうも面白くないようです。彼の発言の中には、虎視眈々（こしたんたん）と司会の座を狙っている言葉が出てきます。そうはさせまいと昇太さんも必死です。それがまた面白くて、「大喜利」の一つの名物となっています。

もちろん笑いのネタの一つです。本当にいがみ合っているわけではありません。司会の座を狙おうとする者、そこに居座ろうとする者の掛け合いが笑いを誘います。

私はそれを笑って見ていません。いかにも仲が悪そうに見える二人ですが、九歳下の後輩に司会の座を奪われた円楽さんは、昇太さんに刺激を与えているように思えるのです。逆に昇太さんは、司会の座にあぐらをかかず、円楽さんに刺激されてます自分の笑いに磨きをかけているように見えます。つまり、司会に当落した二人は、切磋琢磨して番組を盛り上げているのです。私は、二人の関係をうらやましく思って見ています。

一昨日行われた来年度の生徒会役員選挙。今回は全役職が決選投票、つまり当選と落選がはっきりしました。立候補者は、当然それを覚悟しているはずです。そして、その当落が昨日発表されました。

真価が問われるのはここからです。当選したことにあぐらをかいている暇はありません。当選者は自分がやろうとしていることはもちろん、惜しくも落選した仲間の分まで必死になって取り組むことです。落選した仲間が「あんなすごい活躍するのだったら、私が落選するのは納得だ」と思わせることです。逆に落選者は、当選者の活躍に注目し、「いつでも私の目が光っているぞ」と常に刺激し続けることです。落選をひっくり返すことはできませんが、同じ役職の座を目指した者として、当選者に期待しながら鋭い眼を注ぐことです。

もう一つ言いたいことがあります。当落がはっきりしたということは票が割れたということです。「僕はあの子に票を入れなかったから協力しない」ということがあっては絶対にいけません。選挙をした意味がなくなります。どこかの大きな国のようになってはいけませんからね。

（三月十二日　記）